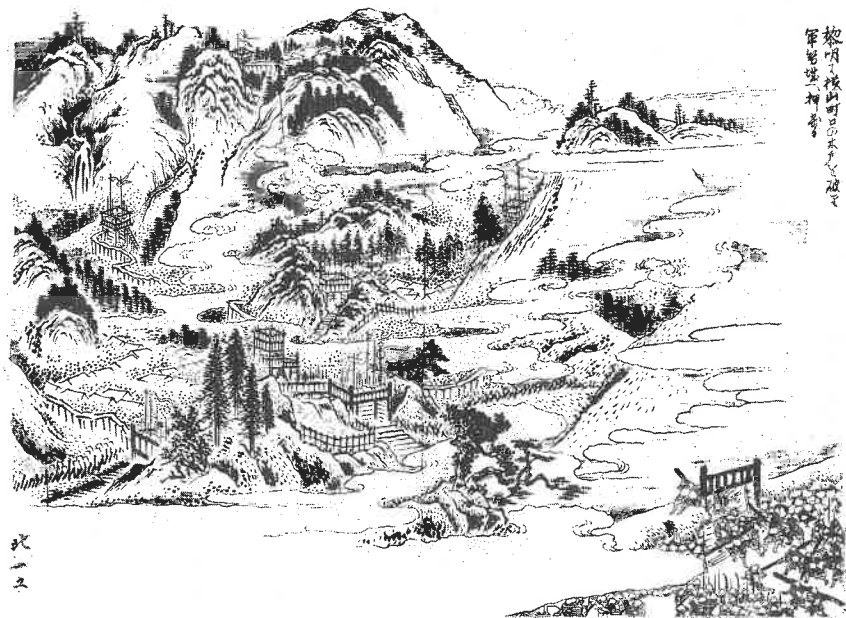


黎明、横山町の木を破り、  
軍勢盛神也。



此一ニ

人に及べり。利家大いに家範が勇鋭を称美し給いて、陣中に誰か中山に由緒のものありやと訊問するに、松山城降人の根岸主計定直は山田伊賀直安の掣にて、勘解由と相掣なり。小岩井雅楽助は家範が馬術の高弟たる由を述べる。この人々はみな松山城の降人なり。利家は中山が義戦顕然たり、疾く疾く馳せ向つて、味方に属すべき旨を告ぐべし。勇烈の義士殺すに忍びざる旨を諭すべしと云。兩人城内に至れば、早や家範は自殺し、その妻も生害しけれど未だ息絶えざりけり。詞を通じ馳せ帰つて、この由を達すれば、利家大いに悼惜して、その英武を感ず（註、植田本に「勘解由勇戦の図」あり。略之）。

この中山がため前田の鋭兵数十人も命を殞しけり。搦手の上杉攻め口は藤田能登守信吉二の丸に乗り入り、堀際にて神保五左衛門壹番首を得る。夏目舎人定吉は藤田が旗本の五十騎にわが組の士を携えて本城の外張際に付き、既に城中より突いて出たる尾谷と称し先に進む敵を夏目突き伏せて、大津主膳に首をとらしむ。城兵今日を限りの死戦、寄手はさすが上杉の猛卒、追い入り追い出され二度も手痛く攻め合い、城兵多く討たれて、残兵は木戸を閉じたり。

夏目舎人は城内に攻め入りしとき、門の扉いぼ金を見置きしが、則ち、これはずさせて乗り入れ本丸に景勝が旗を建てたり。景勝は一庵郭まで押し登り、焼跡に控えて、七手組を諸郭に打ち入れて、申の刻に首実検し、宗徒の士二十一人、惣首数三百七十三級なり。然れども、城中へ攻め入ることは搦手より遅しといえども、大手には中山勘解由殊に驍勇を顕わして死戦しけるゆえ刻を移して、中山が従士三十五人、惣首数二百八十余級なり。内、宗徒の敵首多ければ、利家の隊その功を高くし、各々小田原へぞ献じける。城将の内、横地監物は切り抜けて死を遁る。横地はこの場を切り破りて、檜原村の山中へ入って自殺すと云。

同廿五日に利家、景勝より八王子落城のとき虜とするところの男女を小田原へ送り遣わす。殿下これを小舟五、六艘に乗せて城辺の沖に浮かべて、海手の役所は八王子の軍勢と見ゆる間、「一昨廿三日城郭悉く屠り、城兵を討ち取り、その妻子を虜にして携え来たり。某の母、誰が妻子なり」と、二百人ばかりの姓名を呼ばわりしが、城中にては謀計なるべしと肯んぜず。その船急ぎ乗りかえすべしとて火炮を発す。然る処、中山、狩野が首を僧二人に持た

せて、城下に至らしめ、河原に並べ置きて、中山助六郎、狩野主膳、父の首に對面すべき旨を罵らしむ。兩人は剛士たるゆえ、密かに患いを懐くといえども、籠城の諸士は勇氣悉く衰うとぞ。

八王子の守兵城を枕とし悉く討死することを神君御感のあまり、小田原落城の後、最初にかの城内にて中山家範が嫡子たる助六郎照守、次男左助信吉を幕府の士に列せらる。助六郎は後に勘解由と改めて父の業を継ぎ、馬術に精練しければ、御二代將軍家の御師範となり、且、御使番を勤仕す。その子も助六郎と号し、大坂夏御陣の節に戦功を顕わす。次男左助は水戸頼房卿の長臣になされて、後に備前守に任じ給う。狩野一庵が息主膳も右兩人と同じく幕府の士に列しけり。

北条氏康、氏政は常に謡曲を好み、陸奥守氏照は横笛の上手にて、在城閑暇の時みずから横笛を吹き臣下に乱舞致させ興を催されけるゆえ、大黒と称する名管を秘蔵す。金の高彫をすえて、その形あるゆえに斯くは名付るところなり。この横笛は天下の名器にて、これに對する名管は神祖大君御秘蔵の獅子と号する名管なり。この二管を天下の名